

第2章 1962年（昭和37年）

西ドイツとフランスにおける動き

英国人歌手トニー・シェリダン（Tony Sheridan）の伴奏者として参加した録音を除くと、初めてレコード化されたビートルズの演奏は〔Cry For A Shadow〕だったようだ。ポリドール（Polydor）による録音は、西独ハンブルクへの2度目の出稼ぎ中の1961年6月22日（もしくは23日）。この曲を含むレコードが最初に発売されたのはフランスで、時期は1962年4月。MISTER TWIST と題されたシェリダンのEPのA面2曲目に収録された。ビートルズの名は載っていないが、作曲者として G. Harrison・J. Lennon がクレジットされていた。A面1曲目は〔The Saints〕。B面は〔My Bonnie〕と〔Why〕だった。

ちょっと説明しておく、EP（Extended Playing）と言うのは、シングル盤（直径7インチ、45回転、片側3分程度）よりも溝の間隔を狭めることによって、つまり溝の全長を長くすることによって、再生時間を倍増させたレコード形態。標準として片面ごとに2曲を収録した。ジュークボックスで使うことを想定していなかったため、中心の穴は小さかった。逆に言うと、シングル盤がドーナツ盤とも呼ばれたのは、従来のSP（Standard Playing）（直径10または12インチ、78回転、片面3～5分）よりも中心の穴がずっと大きく、レコード盤の形状が平面的にはドーナツのようだったことによる。

そして、新譜という言葉だが、これは20世紀初頭にレコードが普及するまで、音楽業界は歌を曲譜という印刷物の形で売っていたことに由来する。この歴史は、音楽出版（music publishing）という言葉にも表われている。

1962年のフランスにおける新譜（英国発売に大きく先行したもの）				
発売日	題名	形状	位置	製品番号
4月	Cry For A Shadow	EP	A2	Polydor 21914

ビートルズ旋風日本に到達

最近の通説では、日本における最初のビートルズ・レコードは〔I Want To Hold Your Hand〕で、発売は1964年2月5日。続いて〔Please Please Me〕が3月5日ということになっている。本当にそうだったのだろうか？

“ミュージック・ライブ”の1964年3月号は、〔I Want To Hold Your Hand〕が1月25日に続いて2月1日付の CASH BOX Top 100 でも首位だったことを報じるとともに、New Star というコラムに『ビートルズのレコードは東芝のオデオンから全て発売で、2月5日に「プリーズ・プリーズ・ミー」2月10日に「抱きしめたい」後続々発売予定』と書いた。そして〔抱きしめたい〕を‘ヒット・ソング占い’番付表の横綱に据え、『ビートルズの2弾目』と位置付けした上で、3月9日に“今週のベスト10”で放送されると予告した。また、同誌5月号の‘今月のヒットソング’欄には、〔抱きしめたい〕について、『現在日本でも、先に発売された「プリーズ・プリーズ・ミー」が上位にランクされているようですが』という記述がある。

〔Please Please Me〕の2月発売が1月上旬くらいから予定されていたことは間違いない。なぜなら、〔プリーズ・プリーズ・ミー〕は既に2月号の‘ヒット・ソング占い’番付表に関脇で載っていたからだ。そして、1月31日の“ベスト・ヒット・パレード”に19位で、2月10日の“今週のベスト10”に17位で、2月10日の“ユア・ヒット・パレード”に20位で、初登場していた。他方、〔抱きしめたい〕が“ユア・ヒット・パレード”に初チャートしたのは2月24日。“今週のベスト10”に11位で登場したのは3月16日だった。〔プリーズ・プリーズ・ミー〕が既に3月2日には4位まで上がっていたのにである。

レコードの発売時期とラジオ番組における人気投票の動向とは必ずしも関連するものではない。ところが、ML誌4月号の‘東京で1番売れているレコード’欄を見過ごせない。ML誌が調査した20店における2月の売上順位では、〔プリーズ・プリーズ・ミー〕が9位で、〔抱きしめたい〕が16位だったのだ。これは人気の差なのだろうか？ 私は発売時期の差が影響したのではないかと思う。つまり、レコード番号どおり、そしてML誌が3月号に書いたように、〔プリーズ・プリーズ・ミー〕が〔抱きしめたい〕よりも先に発売されたのではないだろうか？ 少なくとも、通説

それならば、ビートルズの音楽の何が特別だったのか。答はビートルズを嫌った人々の理由に見出せる。その理由は、ロカビリーやツイストを嫌った大人たちの言葉とは違った。ビートルズを不良と判断する視覚的材料（容姿や拳動）が未だなかったからだ。それでは、ビートルズを嫌った人々は何と言ったか。彼らは一様に「ビートルズはやかましい」と言った。この主観的意見は理解できる。伝統的なポピュラー音楽と比べても、ビートルズの楽器演奏は、歌の伴奏にしては音量が大きかった。コーラスも、二人どころか三人が声を張り上げる。時として絶叫になる。土台にあるのはビート。これほど迫力ある音楽を私たちはそれまで知らなかった。〔抱きしめたい〕のライナーノーツを書いた高崎一郎（当時ニッポン放送プロデューサー）は『歌に演奏に若いエネルギーをぶちまける』と表現した。

B面は8分の12拍子の〔This Boy〕（こいつ）。これも好きになった。高崎一郎の解説と抄訳のお蔭で、歌詞の読み方も解った。『自分という人間がふたりいるような気持を、あなたは経験したことはありませんか』という記述に、うなずいた。

このシングル盤のスリーブの表紙に印刷されているのがサイン入りの写真だったことと、高崎一郎が四人の名前と担当楽器を紹介していることから、誰が誰か分かった。ポールが一番かっこよく、ジョンは貴公子という印象。この二人で作詞作曲もするのか ... 凄いなア。ジョージは不良っぽく見えた。

1964年の西独における新譜（英国発売に大きく先行したもの）				
発売日	タイトル	形状	位置	製品番号
2月	Komm, Gib Mir Deine Hand Sie Liebt Dich	S	表面 裏面	Odeon O 22671
4月	Ain't She Sweet	S	A面	Polydor NH 52317

1964年の米国における新譜 (英国発売に大きく先行したもの)				
発売日	タイトル	形状	位置	製品番号
4/10	THE BEATLES' SECOND ALBUM	LP		Capitol (S)/T 2080
	Long Tall Sally		1-1	
	I Call Your Name		1-2	
5/21	Sie Liebt Dich	S	表面	Swan 4182
7/20	SOMETHING NEW	LP		Capitol (S)/T 2108
	Komm, Gib Mir Deine Hand		2-5	

1964年前半の英国における新譜				
発売日	タイトル	形状	位置	製品番号
2/ 7	ALL MY LOVING	EP		GEP 8891
	All My Loving		1-1	
	Ask Me Why		1-2	
	Money (That's What I Want)		2-1	
	P.S. I Love You		2-2	
2/28	Cry For A Shadow	S	B面	NH 52275
3/20	Can't Buy Me Love	S	表面	R 5114
	You Can't Do That		裏面	
5/29	Ain't She Sweet	S	A面	NH 52317
6/19	LONG TALL SALLY	EP		GEP 8913
	Long Tall Sally		1-1	
	I Call Your Name		1-2	
	Slow Down		2-1	
	Matchbox		2-2	

文化放送は、火曜日の7:00～8:50だけだった“電話リクエスト”を月曜～土曜の“電話リクエスト／ハロー・ポップス”に拡大して、やはり10月26日（月）に放送を開始した。司会は曜日によって異なり、桑原亘アナウンサー、志摩タ起夫、ロイ・ジェームス、関光夫、吉本雅勇アナウンサー、本多俊夫といった多彩な顔触れだった。毎晩、最後にその日のベスト5をかけるのだが、〔I Should Have Known Better〕が異常なほど高い人気を得ていたことが思い出される。なお、“電話リクエスト”の拡大に先立って、木曜日の“9500万人のポピュラー・リクエスト”が10月15日から1時間繰り下がった。

文化放送は11月27日にも新番組をスタートさせた。“ビルボード全米ヒットパレード・トップ10”と呼ばれた番組は、毎週ニューヨークのビルボード社へ電話をかけて、最新 Hot 100 の上位10曲（後に20曲へ拡大）を教えてもらうという斬新な企画。放送は金曜日の夜10:15～10:30だった。初回の放送で〔I Feel Fine〕発売（米国では11月23日）のニュースが流れたのではなかっただろうか。DJは、私の記憶に間違いなければ、いそノてるヲ。1966年4月29日まで1年半近く続いた。

11月に起きたエピソードがある。キンクスの〔You Really Got Me〕を買った私は、レコードを学校で級友たちに見せた。すると、NJ君が憤慨した。スリーブの上部に印刷されていた‘ビートルズをぶっ倒せ！’という文言に対してだった。その後、彼はローリング・ストーンズなどのレコードも買い、ハーマーズ・ハーミッツ（Herman's Hermits）のコンサートへも行ったのだが、キンクスだけは無視続けた。同じような人が少なくなかったとしたら、日本コロムビアの宣伝文句は大きな失策だ。

〔I Should Have Known Better〕と〔I Feel Fine〕に挟まれて、11～12月に各ヒットパレードの上位にあったのは〔Slow Down〕。〔Matchbox〕を表側にしたレコードの売上も、ML誌の調査ではベスト10に入っていた。この2曲、そして年明けにヒットする〔Long Tall Sally〕は、英国では6月にEP盤で発表されていた。

BEATLES FOR SALE

2月初頭に発売された2枚のシングル盤には画期的な側面があった。〔No Reply〕／〔Eight Days A Week〕と〔Rock And Roll Music〕／〔Every Little Thing〕のスリーブには、歌詞のみならず対訳が載っていたのだ。ビートルズの歌詞の対訳がレコードに付いたのはこれが初めて。『訳詩』をしたのは橘明子という人で、〔Rock And Roll Music〕では、間違った聴き取り部分もそのまま対訳を施していた。スリーブの紙面の大きな部分を対訳が占めたので、解説は筆者不明の数行のみだった。

とは言っても、いわゆる歌詞カードに対訳を併記することが定着したわけではない。十日後にリリースされたアルバム BEATLES FOR SALE には対訳は付いていなかった。5月と8月に出た〔Ticket To Ride〕と〔Help!〕のシングル盤も、スリーブに印刷されていたのは歌詞と高崎一郎による解説だけである。3月と4月に発売された3枚のシングル盤には橘明子による訳詞が付いていたのだが。

BEATLES FOR SALE のジャケットはユニークだった。裏側の全面もカラー写真（ただし、どちらの写真もシングル盤2枚のスリーブに使用したものと同じ）。折畳み式になっていて、見開きの左下と右側にも白黒写真。左上には曲目と木崎義二による解説が印刷されていた。ところで、東芝音楽工業の広告によると、このレコードを買って2月15日から4月30日の間に応募すると抽選でビートルズの写真などがもらえるとのことだった。残念ながら、私には何も送られてこなかった。

収録曲の人気は前作 A HARD DAY'S NIGHT を上回るものだった。それどころか、MEET THE BEATLES! 以上だったかもしれない。人気のピークは3月。3月25日の“9500万人のポピュラー・リクエスト”では、1位が〔Rock And Roll Music〕、2位が〔Eight Days A Week〕、5位が〔No Reply〕、19位が〔Mr. Moonlight〕という具合（加えて、16位が〔Long Tall Sally〕）。“ミュージック・ライフ”誌によると、東京における3月の洋楽シングル盤売上ランキングでは、1位が〔Rock And Roll Music〕、8位が〔No Reply〕／〔Eight Days A Week〕、19位が〔Kansas City〕、30位が〔Mr. Moonlight〕だった（加えて、15位が〔Long Tall Sally〕、19位が〔I Feel Fine〕）。

まったくなかったのに、レコードを持っていたら貸して欲しいと話しかけてきた。アルバム HELP! を貸してやったら、〔Yesterday〕のトラックにだけノイズが増えてレコードが返ってきた。他のトラックが無傷だったことを喜ぶべきか、悲しむべきか？ それ以降、MK君もたまにレコードを買うようになり、ザ・スパイダースの〔なんとなくなんとなん〕、ヴィッキー（Vicky Leandros）が歌う〔L'Amour Est Bleu〕（恋はみずいろ）などを借りた覚えがある。遠距離サイクリング、キャンピング、映画鑑賞、大学休暇中の短期間労働などを共にするような仲にもなった。

映画“HELP! 4人はアイドル”の公開が始まったのは11月13日の土曜日。封切館は数寄屋橋にあった有楽座で、一日4回（初日と日祭は5回）の上映が11月25日まで続いた。前日の“朝日新聞”に掲載された広告によると、料金は一般380円、学生と団体が330円、指定席が600円と800円。

A HARD DAY'S NIGHT の時と違って、私がこの程度の金銭を心配する必要はなかった。もはや中学生でもないし、MS君という同行者がいるので、未知の高級繁華街へ行く不安も感じなかったはずだ。私たちは日曜日にあたる二日目の朝10時から見ることにした。初日は、午前中は学校があるので午後2:30前に入場するのは時間的に窮屈だし、4:50からの部も見ると帰宅が遅くなるからである。しかし思惑が外れた。10時からの部が終わると、退場を強制された。居残って12:10からの部も見ることには許されないのだ。前日の初日に入場できなかった人が出た結果の措置とのこと。指定席は別として、映画館で入れ替え制が導入された先例はあったのだろうか？ とぼとぼ出口へ進んでいると、右の方から「秋山くーん」という声が聞こえた。2階から級友のIYさんが手を振っていた。映画館を出る前にプログラムを買った。

HELP!は第一にビートルズ映画だった。つまり、ビートルズがスクリーンに映っていることだけで意義があった。観客席からは「きゃあ!」とか「危ない!」といった女性の声が飛び交い、前日に観ているのではないかと思わせるような独白もあった。私は特に〔Help!〕、〔You've Got To Hide Your Love Away〕、〔You're Going To Lose That Girl〕、〔I Need You〕の演奏シーンと、英国内におけるビートルズの服装に魅了された。翌日の学校でKSさんたちと話しているIYさんの言葉が聞こえた。「ジョージって、がりがりなのね」。

シングル盤にならなくてもヒットするのがビートルズの名曲。LP発売から間もなくして、〔Michelle〕と〔Girl〕がラジオの各ヒットパレードに登場。概ね4～6月に上位にあった。また、米国から2ヵ月遅れて発売されたシングル〔Nowhere Man〕が5～7月にヒット。この結果、5月になって、東芝音工はこの4曲を1枚のコンパクト盤にまとめて発売した。思惑が的中。“ミュージック・ライフ”の8月号から10月号によると、6月と7月の2ヵ月間、東京阪神の主要21レコード店の売上第3位にあった。

RUBBER SOUL にはこれまでに日本で発売されたアルバムとは異なる点が四つあった。第一に、題名にバンド名も収録曲名も含まれていなかったこと。ゴム製の魂？ 第二に、ジャケットが両面とも英国製のものと同じだったこと（日本製のBEATLES FOR SALE では、見開きの左側に印刷されているライナーノーツが日本語）。第三に、ライナーノーツが皆無。全曲がオリジナル作品の上に、作者名およびボーカルの分担ならびに特別な楽器の演奏者名がジャケットの裏面に簡潔な英語で記されていたので、解説の種がなかったのだろうか。もう一点は、歌詞リーフレットに対訳が印刷されていたこと。訳詞者は、OR-1445の2曲と同じく、高橋淳一だった。

本書を著すにあたってほぼ半世紀ぶりに歌詞リーフレットを見て、気づいたことがある。〔Norwegian Wood〕に邦題が付いていないのだ。題名は『ノーウェジアン・ウッド』。さもありなん。私が『ノルウェーの森』などという馬鹿げた邦題を耳にしたのは少し後のことだったように思う。とは言っても、高橋淳一による『ノルウェー・スタイル愛の巣』や『ノルウェー・スタイル愛の朝』という意識は感心しない。話者は愛を得ることができなかったのだから。

それでは、『ノルウェーの森』という邦題はいつ、どこから来たのか？ 私が調べたところによると、キングストン・トリオ（The Kingston Trio）が1966年6月に発表したアルバム CHILDREN OF THE MORNING に〔Norwegian Wood〕のカバーが収録されていた。当時キングストン・トリオは日本で人気がすごぶる高かったため、日本におけるレコード発売元のテイチクがこのトラックを独自のシングル盤として発売。1966年7月だった。その時に付けた邦題が『ノルウェーの森』で、これがアルバム（SDL-10246）の邦題にもなったというわけ。そして、この邦題を

東京公演

“ミュージック・ライフ” 4月号の表紙にビートルズの写真が使われたことは、もはや小躍りするようなことでもなかった。彼らの人気と写真写りの良さを考えれば、当然である。しかし、写真の上に印刷されている文字に驚かされた。いわく『ビートルズが8月に来日する?』。雑誌内の記事によると、3月8日にML誌が英国の NEW MUSICAL EXPRESS 誌へ電話。ニュース編集者のクリス・ハッチンスが『6月が可能性の高い月になる。エプスタインによると、日本とドイツへの旅行はおそらくアメリカ旅行前になる』と語ったのだ。

4月9日、毎日新聞の夕刊に『気をもたせるビートルズ 6月末にやってくる?』という見出しの記事が載った。記事の結論は『いずれにしても、4月中旬には、くわしいことが決まるという』。招聘実現の可能性がありそうな印象を受けた。

4月27日、コンサートの主催者となる読売新聞が『世界最高の人気グループ ザ・ビートルズを招く 6月下旬、東京で演奏会』と紙上で発表。待ちに待った報道だ。『演奏日程、会場、曲目そのほかは追って発表します』とのこと。

その発表があったのは5月3日の読売新聞紙上。『待望の日程決まる ザ・ビートルズ 東京だけで3回公演』という見出しで、詳細が発表された。日程は6月30日から7月2日。会場は日本武道館で午後6時30分開演。入場料はA席2100円、B席1800円、C席1500円。申し込みは、個人名義による官製往復はがきを使って、希望する券の種類を指定するようにとのこと。観覧日の指定はできないようだった。5月5～10日の消印が有効で、5月中頃に抽選を行い、5月末に当選はがきと交換で入場券を購入できるよし。もちろん私も申し込んだが、『1人1枚に限り受け付ける』と書いてあったので、それを糞真面目に受け止めて、家族や友人の名義借りをしなかった。

入場券を手に入れる可能性はほかにもあった。協賛会社のライオン歯磨は、製品の空き箱2個を送ると抽選で5000人がコンサートに招待されると広告した。東芝音楽工業は、6月15日までにビートルズのLPを買った人の中から抽選で2000名に入場券を進呈すると宣伝した。確実に入手する方法もあったようだ。私は後で知ったのだが、ニュー・クリスティ・ミンストレルズ（4月下旬）、パット・ブーン（5月下旬～6月上旬）、フランス・ギャル（6月中旬）の公演入場者は、ビートルズ公演の

望月浩が現れると、「望月浩、引っ込めー！」という声が後ろから聞こえた。聞き慣れた声なので振り向くと、NJ君がほほ微笑んでいた。隣にはOT君。この一角は前述のファンクラブが手配した席だったのだろう。NJ君のお蔭で来れたというのに、私の席が彼よりも3列くらい前だったので、申し訳ない気がした。前座終了後の休憩時間にNJ君およびOT君と会話。「ちょっと後ろに田辺昭知がいるよ」と言うので、そちらへ目を向けると、かの有名なドラマーの姿があった。スパイダースが出演しなかったのは、楽屋でビートルズに会えるわけでもないのに、観客になるほうを選んだらしい。私には納得できる話だ。その観客を見渡すと、意外と男性が多かった。男女の比率は4対6か、それに近かったかもしれない。

7時半、EHエリックの手短なアナウンスメントに続いてビートルズがステージに登場。衣装は赤系色のストライプが入った淡灰色のスーツ。シャツは赤。ネクタイはしていない。なぜか、四人の靴はまちまち（週刊読売の臨時増刊に載った写真を見て分かった）。歓声が巻き起こる。ジョンはトレードマークのようにになっていたリッケンバッカーとは違うギターを手にしている。ジョージも同じギター（後でリッケンバッカーの12弦も使用）。そしてジョンが〔Rock And Roll Music〕イントロの和音4拍をストロークすると、歓声が一挙に大きくなる。そして私の耳には最後まで演奏はほとんど聞こえなかった。後年、演奏が良く聞こえたという人に出会ったことを考えると、聞こえ方は座席の位置によって大きく異なったのだろう。そもそも武道館はコンサートホールではないのだから。また、たまたま私の周囲には歓声を上げ続ける人が多かったのかもしれない。

私が夢見心地だから聞こえなかったのではない。ビートルズの演奏中に隣で起きたことをはっきり覚えている。MS君がかばんからカメラを取り出して、写真を2枚ほど撮ったのだ。彼はすぐさまフィルムを取り出して、ズボンのポケットにしまった。警備員がやって来た。MS君は「望遠鏡として使ってるだけです」と言って、ペンタックスの蓋を開けて内部を見せた。警備員が立ち去った。

また私の視線がステージに釘付けになっていると、ビートルズが手を振りながらステージから去って行くではないか。まさか、もう？と思ったら、EHエリックが現れてコンサートの終了を告げた。なんともあっけなかった。時計は8時を少し回っていた。演奏曲目は前2回と同じ11曲だったのではないだろうか。

ほどなくして楽譜“SERGEANT PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND LP全曲集”が発売された。〔Strawberry Fields Forever〕と〔Penny Lane〕が含まれているのは大歓迎だが、REVOLVER からの5曲と〔Michelle〕（これで三冊目）は余計。この6曲を外して定価（350円）を下げてもらいたいと思った。それでも私は購入した。コードが分かれば、ギターの弾き語りができる。

世界宇宙中継TV番組

SGT. PEPPER'S LONELY HEARTS CLUB BAND が日本で発売される9日前、ビートルズが関連する重大な出来事があった。初の世界宇宙中継TV番組 OUR WORLD（邦題“われらの世界”）の放映である。参加したのは14カ国。視聴者は31カ国の4億人と推定された。

とは言ったものの、重大だったのはビートルズの熱心なファンにとってだけのこと。それ以外の人には関心が低い出来事だった。日本は既に3年半前に日米間のTV中継を実現させていたからである。新聞で報道されたのは4日前、特別番組のスケジュールが決まった時くらい。そのような状況において、私はどのようにして特別番組のことを知ったのか？ ラジオの洋楽番組から情報を得たに違いない。

6月26日（月）、朝4時前に起床して、茶の間のTV受像機の前に座った。日本ではとんでもない時刻だが、米国本土で日曜（25日）の午後、英国では日曜の夜という好時間帯の放送なので、仕方ない。3時55分にNHKがオンエア。特別番組は4時に始まり、新生児の出産、牧場における馬の操縦、地下鉄工事など、参加国からのレポートが続いた。当時の私にとっては退屈なものばかりだった。

5時54分、ロンドンのEMIスタジオが写し出された。東京公演から1年経って、再びリアルタイムで見るビートルズ。〔All You Need Is Love〕演奏の様子は、ビデオ THE BEATLES ANTHOLOGY に収録されているとおりである（オリジナル映像は白黒）。まず、私はポールが髭を剃っていることが嬉しかった。歌は、聞き慣れたイントロ、分かりやすいリフレイン部、陽気なエンディングのために、すぐに気に入った。フラワー・ムーブメントとの関連やサイケデリック文化の影響に私が

第8章 1968年（昭和43年）

ビートルズの新曲で正月がにぎわった。2年ぶりのことである。しかし、私はこのシングル盤を買わなかった。その両面を収録した米国編集アルバム MAGICAL MYSTERY TOUR の到着を待っていたからだ。そして期待どおり、その2曲はステレオ・ミックスだった。

レコードが発売された2週間後の1月24日（水）、〔Hello, Goodbye〕のプロモ・フィルムがTVで放映された。番組はフジテレビの“スターキー夜”で、その日の放送時間は夜10時半から15分間。放映はカラーで、星加ルミ子の紹介で始まったのではなかっただろうか。ビートルズの出で立ち軍楽隊 SPLHC の鮮やかな制服。動く彼らを見るのは〔All You Need Is Love〕を演奏した宇宙中継以来の7ヵ月ぶりで、私には感動ものだった。それに応えるかのように、特にリンゴとポールがマイムを手抜きなく演じてくれた。このフィルムは2月3日（土）午後3:15～4:00の“ビート・ポップス”の中でも放映。その時は白黒だったと思う。

1968年前半の日本における新譜				
発売日	タイトル	形状	位置	製品番号
1/10	Hello, Goodbye I Am The Walrus	S	表面 裏面	OR-1838
3/10	MAGICAL MYSTERY TOUR			
	Magical Mystery Tour	EP	1-1	OP-4335
	Your Mother Should Know		1-2	
	I Am The Walrus		2面	
	The Fool On The Hill	EP	1-1	OP-4336
	Flying		1-2	
	Blue Jay Way		2面	

その一方、映画 MAGICAL MYSTERY TOUR の日本公開予定はなかなか決まらなかった。しかし星加ルミ子が4月初頭にビートルズの会社アップルの仮事務所へ出向き、放映契約を交わして、ロンドンからフィルムを持ち帰った。仕事の一部とは言え、星加の行動力には感服する。インドから戻って間もないポールの部屋で、ポール、リンゴ、ドノヴァンの三人と会った様子がML誌6月号で記事になっていた。7月号では映画撮影中のカラー写真18枚がグラビア7ページを彩った。そして8月号でついに上映予定を発表。日時は9月28日（土）の午後3～5時で、場所は日本武道館。不二家のチョコレートの上巻50円分を9月10日までに同社へ郵送すると、抽選で1万人が入場できるとのことだった。応募総数は十万数千通にも上ったらしいが、私は幸運にも入場券を手に入れることができた。ただし、何通応募したか覚えていない。

私はKY君と一緒に武道館へ行った。不二家主催、東芝音楽工業とミュージック・ライフ協賛のイベントの前半はウォーカー・ブラザーズとビーゼーズのフィルムおよび映画 YELLOW SUBMARINE の予告編の映写。後半が待望の MMT の上映だった。

映画として観ると、MMT はあまり面白くなかったかもしれない。だが、既に聞き慣れていて、しかも気に入っている楽曲を抱き合わせ映像とともに鑑賞するという観点では楽しかった。私が最も注目したのは[I Am The Walrus]の疑似演奏シーン。特にリッケンバッカーのベースを弾くポールがかっこよく見えた。

フィナーレの〔Your Mother Should Know〕にはうっとり。そして、その後の何日間か、私とKY君は校舎内の階段を降りる時、Let's all get up and dance to a song that was a hit before your mother was born ... と口ずさみながら、あのステップを踏むのだった。

10月6日（日）の午後3:30～4:25、“ビートルズのふしぎな旅「マジカル・ミステリー・ツアー」” がTBSで放映された。ところが、フィルムの順序が間違っしまい、10月10日（祝）の午後4:00～4:55に再放送となった。

輸入盤（2）

1969年になると、米国からの輸入レコードの平均価格が下がっていた。日本円の価値は未だ低かったので（\$1=¥360）、購入者が増えて小売業者および輸入業者の買付量も増えたためだろう。加えて、関西の通信販売店を中心とした販売競争があったかもしれない。2000～2500円の米国盤に加えて、英国盤を2500～2800円で売る業者も現れていた。このような状況下、日本楽器銀座店が、9月1日から12月31日という期間限定ながら、米国盤の価格を2000円に下げた。日本盤の標準的価格と同額である。

KY君はこれに飛び付いて、MEET THE BEATLES から REVOLVER までの米国盤をすべて買った。目的はジャケットの蒐集だったが、レコードをかけてみたところ、日本盤との違いはジャケットと曲目だけではなく、〔You Can't Do That〕や〔I Feel Fine〕のようにサウンドの印象が異なるものがあるのみならず、録音やミキシングや演奏自体が違うものをいくつも発見した。最初に気付いたのは、キャピトルのステレオ盤における〔I Call Your Name〕では、カウベルのスタートのタイミングが遅いこと。〔The Word〕ではボーカルとインストルメンタルが初期のステレオのように左右に分離。最も驚いたのは、〔I'm Looking Through You〕のイントロが長いことだった。その後何度も聴くうちに、ユナイテッド・アーティストズが発売した A HARD DAY'S NIGHT のサウンドトラック盤では、〔I Should Have Known Better〕だけでなく、〔If I Fell〕、〔And I Love Her〕、〔Tell Me Why〕にも聴き慣れたステレオ盤とは演奏面で違いがあること発見した。さらには、〔We Can Work It Out〕と〔Day Tripper〕におけるミキシングの違いなど。このような隠れた秘密探しをするようになると、私もKY君も、ビートルズのレコードに飽きるどころか、ますますのめり込むのだった。

それから1年か2年経って、私は新宿の帝都無線というレコード店で PLEASE PLEASE ME と WITH THE BEATLES の西ドイツ盤に遭遇した。私は“来日記念盤 ステレオ！これがビートルズ”を買わなかったで、この2枚のLPに収録されている曲はモノラルでしか持っていなかった。正確な値段は覚えていないが、高くなかったで、物珍しさも手伝って、2枚とも買った。家に帰って、針を落として驚いた。〔All My Loving〕にハイハットによるイントロが付いていたのだ。

第11章 1971年以降

海賊盤

1971年1月だったと思うが、大学構内のカフェテリアで友人たちとテーブルを囲んでいると、英語学科の知り合いのひとり（どうしても名前を思い出せない）からビートルズの海賊盤の話が出た。海賊盤というのは非正規に販売されているレコードで、ローリング・ストーンズ、フーなどが主にコンサートにおいて録音したものが流通しているということは聞いていた。彼はなんとビートルズの実況録音盤入手したと言うのだ。買った店の地図を書いてもらい、KY君と一緒に新宿三丁目へ。場所は花園神社の近くで、万屋のような感じの店だった。中へ入って、来た目的を告げると、THE BEATLES IN CONCERT AT WHISKEY FLAT と青緑のゴム印を押した真っ白なジャケットを見せてくれた。KY君と1枚ずつ買った。値段は覚えていないが、通常の輸入盤より高かったと思う。ヴァイナルは透き通った黄色。内容は1964年の米国公演の完全な連続収録で、曲目は〔Twist And Shout〕、〔You Can't Do That〕、〔All My Loving〕、〔She Loves You〕、〔Things We Said Today〕、〔Roll Over Beethoven〕までが第1面。第2面は〔Can't Buy Me Love〕、〔If I Fell〕、〔I Want To Hold Your Hand〕、〔Boys〕、〔A Hard Day's Night〕、〔Long Tall Sally〕。音質は、AM放送に慣れていた私の耳には十分なもので、興奮して何度も繰り返し聴いた。

ほどなくして、西新宿の新宿レコードに同類の音盤が色々あるという話を聞いた。訪ねてみると、間口が狭く（ドア2枚分くらいだったか）奥行もあまりない店で、元々はクラシックの輸入盤が専門とか。経営者はF夫妻。私とKY君は RENAISSANCE MINSTRELS VOLUME I と題したLPを買った。ジャケットに貼られた黄土色の紙には、中世吟遊詩人の服装をしたビートルズの絵。収録されているのは1964年のエド・サリヴァン・ショーにおける8曲、9演奏だった。TVで1回だけ観聴きしてから6年。この音盤にも興奮した。